

白梅学園短期大学
公開講座(22)

2002年11月30日～2003年3月1日

「大学の先生が授業する
国語・数学・理科・社会・英語」

講師：近藤正樹 東 喜望 金子尚弘

平賀明彦 瀧口 優

各氏

2002年度の教養講座は、聴講者の対象を中学生にすえ、従来とは多少趣向を変えて実施した。「ゆとりの時間」が逆に「学力の低下」を引き起こすのではないかと話題になり始めて久しい。その中で、そもそも「学力」とは何か、という議論が活発に行われている。本講座は、もともと学ぶことは楽しいこと、という考えに基づき、現在、学問研究に携わっている本学の教員が、どのようにして自分の研究を作り出してきたか、その元になった教科をどのように学んできたかを振り返りながら、学問研究の基礎を学びつつある中学生に、喜びを伝えながらその教科の基礎中の基礎を紐解こうとした試みである。

当初は、地元小平市の生涯教育プログラムや親と子の共同学習プログラムとリンクさせる案も出されたが、今回は、とりあえず小平市市報に参加を呼びかける広告を載せるにとどめ、参加者を募った。企画は各教科1回ずつの5回を、飛び飛びにはなったが土曜日の2時から4時。対象が中学生であることを念頭に途中15分の休憩を入れて2時間の授業を本学の教室で実施した。参加費無料で、親の参加も歓迎とうたい、参加希望者は中学生の数で10数名となった。

第1回（11月30日）の理科では、参加者8名と保護者をむかえ、近藤正樹教授が講義。「日なたと日かげ」と題した講義は、自分の経験から紐解き、身の回りにあるものの観察が科学に結びついていった経緯を展開する。それは植物学から動物学、天文学や物理学と、小さな観察が科学全体に広がっていくダイナミックさを伝えるものであった。

第2回（12月14日）は東喜望教授（現名誉教授）が国語の授業を実施。参加者は10名と保護者。教授は、言葉は学力の基礎であるという観点から、自分が言葉の美しさに惹かれた経緯を金田一京助の「言葉の小道」を題材に語りかける。文章はすぐに意味を成さずとも長い人生のどこかでその意味が分かることもある、と教養とは結果を急ぐものではないと情熱的に訴えながら、多くの文章を読んで欲しいと授業を結んだ。

第3回（2003年1月25日）は金子尚弘教授が数学の基礎を、中学生と一緒に円を書くなどの作業をしながらの授業となった。円周をどう測ったらよいか、それを直径で割ってみる。新学習指導要領では円周率 π が「3」となり話題を呼んでいたが、 $3.14\cdots$ となる近似値を統計学と絡めながら中学生の瞳孔を広げる授業となった。参加者は4名と保護者。

第4回目（2月22日）社会を担当した平賀明彦教授は、パワー・ポイントを使用して分かりやすさだけではなく美しく、身近にある鎌倉街道や玉川上水がどのような意味で作られ、そして今どうなっているかを紹介する。紛れもなく地理学、歴史学、その裏に隠れている政治学という社会を形成する学問群を数値や年号を暗記するのではなく、人間の生活の中でゆっくりと形成される社会というものの見方を丁寧に分析した。参加者5名と保護者は、準備万端のパワー・ポイントに歴史の一ページを堪能したと言っている。

そして本講座の最終回第5回（3月1日）は英語。楽しい題材を多くしかも入念な準備のもと臨まれた瀧口優助教授に、外国語の楽しさを導かれ

た参加者は1名と保護者。授業の中からのじみ出てくる「外国語は楽しい」というメッセージは、もっともっと多くの中学生に聞いて欲しかったという想いは否めない。

聴講者が少なかったのは企画立案の遅れやそれに伴う広告の遅れが直接の原因であった。さらに、さまざまなセンターの企画の中で、飛び飛びの土曜日、1ヶ月空きというような日程や、中学生の年中行事を視野に納めない日程に問題があったよ

うに思われ、今後の課題である。しかしながら、「学力とは何か」という議論に、一石投じることはできたと考える。担当した講師陣が並べて訴えた内容は、学問はあなたの身の回りに転がっている、そこに目を向けてみれば世界が広がる、企画担当者であり本稿の執筆者が勝手にまとめたことになるが、この一点に本学の教養講座が中学生に語りたかったメッセージがあると考えたい。

(中島 好伸)